

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第652号 平成25年12月2日

デザイナーベビー

「デザイナーベビー」が、現実味を帯びて来ました。

「デザイナーベビー」というのは、親が望む外見や体力・知力等を持った子どもを作る為に遺伝子操作を行い、その結果生まれた子供をいいますが、将来そうした事を可能にする技術がアメリカで開発され、特許まで取得したというニュースは、生殖医学界のみならず社会に大きな波紋を広げています。

この新技術は、アメリカの個人向け遺伝子解析会社（23アンドミー）が開発したもので、両親の唾液に含まれるDNAの遺伝子配列の僅かな違い（SNP）を分析して、アルツハイマー病や糖尿病等120の病気のリスクの他、目の色や筋肉のタイプ等計250項目を判定するというものです（10月20日付朝日新聞から）。

今回、特許が認められたのは、これ迄に得られた病気のリスク等独自のデータや情報を利用する手法ですが、この技術を開発した会社では、特許のコンセプトを実用化する意図も計画もないとしています（10月20日付朝日新聞から）。

相対性理論を生み出した物理学者アインシュタインに、あの美貌の持ち主マリリン・モンローが「私の美貌とあなたの頭脳を持った子どもができれば、素晴らしいと思わない？」と言寄った（？）ところ、「アインシュタイン」がマリリンに「私の顔とあなたの頭脳を持った子どもが生まれるかも知れないよ」と切り返したという話は有名です。

このやり取りが成立するのは、夫婦の間にどのような子が生まれるかは神のみぞ知る世界だと皆が思っているからで、これが、まるでデザインを描く様に親の思い描く子どもが作れるという事になると、流石のアインシュタインもあの様に旨くは切り返せないかも知れません。

遺伝子解析の精度は、現状ではまだばらつきがあり「デザイナーベビー」が出現し得る状況にはないようですが、今後遺伝子解析の精度が向上すると、マリリンがいった事も現実起こる可能性が出て来ました。

生殖技術は、そこまで高度化して来たという事ではありますが、こうした状況に対して北里大学の高田史男教授（臨床遺伝学）は、「パーフェクトベビー願望をかなえる検査が、ビジネスの世界で歯止めなく広がるのは危険だ。」と述べると共に、「日本も国として、こうしたビジネスが野放しに広がらないような枠組み作りが必要」

だとしています（10月20日付朝日新聞から）。

私も、精子や卵子の遺伝的情報を基に生まれて来る子を選別するという考え方は、生命倫理にも反すると考えていますので、高田教授のおっしゃるように、今後、野放図にこの技術が使われない様規制する必要があると思っています。

ただ忘れてならない事は、如何に生殖技術が発展し、高度化しようとも、子どもの成長に関して「氏より育ち」というのは、今後も変わらぬ真理だという事です。どんなに素晴らしい遺伝子を持って生まれた子であっても、その子が成長して行く過程で、置かれている環境の影響から逃れることは不可能なのですから。

（塾頭：吉田 洋一）